



TITLE:

<書評>三尾裕子・床呂郁哉編:『グローバルゼーションズ--人類学、歴史学、地域研究の現場から』弘文堂、2012年、4,600円＋税、354頁

AUTHOR(S):

小川, さやか

---

CITATION:

小川, さやか. <書評>三尾裕子・床呂郁哉編:『グローバルゼーションズ--人類学、歴史学、地域研究の現場から』弘文堂、2012年、4,600円＋税、354頁. コンタクト・ゾーン 2014, 6(2013): 253-259

ISSUE DATE:

2014-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/198471>

RIGHT:

三尾裕子・床呂郁哉編

# 『グローバリゼーションズ ——人類学、歴史学、地域研究の現場から』

弘文堂、2012年、4,600円＋税、354頁

小川さやか

本書は、2008年度から2010年度にわたって東京外国語大学で開催された共同プロジェクト「アジア・アフリカ地域におけるグローバル化の多元性に関する人類学的研究」を基礎に編まれた論文集である。本書の寄稿者のうち湖中、床呂、大村の3名は、2005年に『文化人類学』（第75巻1号）で組まれた特集「「グローバリゼーション」を超えて」にも類似した問題意識に基づく論文を寄稿していることから、本書はこの特集をより多角的に組み直したものとしてみることもできよう。

論文や学会発表にて「グローバル化の進展に伴い」が枕詞のように使われるようになって久しい。グローバリゼーションは、経済学や政治学だけでなく、社会学、歴史学、宗教学といった人文社会科学、環境問題やエネルギー問題などに関わる自然科学の様々な分野において議論されている重要なテーマである。いまやグローバリゼーションの概念規定や理論的潮流を整理し、新たな視座を提起することは極めて困難となっている。

その困難な課題に挑戦し、「グローバリゼーションズ」（複数のグローバリゼーション）を掲げた本書の目論見とはいかなるものか。以下ではまず、本書を貫く問題意識・課題設定と各章の概要を整理した後、本書全体の独自性とそれに関する疑問点を述べたい。本書の内容は以下のようになっている。

- 序章 なぜ「グローバリゼーションズ」なのか（三尾裕子・床呂郁哉）
- 第1章 スルー海域世界から見える複数のグローバリゼーションズ（床呂郁哉）
- 第2章 中国系移民におけるグローバリゼーション経験  
——ベトナムを中心として（三尾裕子）
- 第3章 パレスチナ人のグローバルな移動とナショナリズム  
——「中心」を相対化する「周辺」の日常実践（錦田愛子）
- 第4章 グローバリゼーションのなかのマレー・ディアスポラ運動（富沢寿勇）
- 第5章 露店はモールを夢見るか  
——グローバル化するインドにおける露天商ビジネスの現在（岩谷彩子）

第6章 「アフリカ」の売り方

——グローバリゼーションのなかの東アフリカみやげ物業（井上真悠子）

第7章 グローバリゼーションと移民を結ぶ文化的ロジック——台湾の華僑ムスリム移民はグローバルなフローをいかに意味づけるのか（木村自）

第8章 変わる移住先、変わらぬ構造——近代以降におけるハド라마ウトの「生き残り策」とコミュニティの形態（新井和広）

第9章 ポスト・グローバリゼーション期への人類学的射程  
——東アフリカ牧畜社会における紛争の事例（湖中真哉）

第10章 バナナとグローバリゼーション（小松かおり）

第11章 未来の二つの顔に——モノの議会とイヌイトの先住民運動にみるグローバル・ネットワークの希望（大村敬一）

三尾と床呂による序章では、これまでの人文社会科学における主要なグローバリゼーションの議論が概観されているが、本書全体に関わる従来研究の問題は、以下の二つである。

第一に、欧米中心的なグローバリゼーションの理解の枠組みに関する問題である。三尾と床呂は、主流派のグローバリゼーション理解は、「グローバルなフローのインパクト／ローカルなレスポンス」といった二分法ないし「欧米などの中心／その他の周辺世界」「南北問題」といった二項対立図式を暗黙の前提としたものが少なくない（p.2）と指摘する。そして、この前提を相対化するために、必ずしも欧米を中心としない複数の人やモノ、文化のフローに注目しながら、グローバリゼーションの概念自体を多元化し、複数化していく必要があると述べる。

第二に、グローバリゼーションを論じる際の時間軸の問題である。彼らは、現在のグローバリゼーションをめぐる言説の多くは、グローバリゼーションを現代社会におけるトランスナショナルな資本主義の展開に付随して生じた極めて新しい現象として捉える場合が多い（p.9）と問題化する。さらにプレモダンのグローバリゼーションを扱った先行研究も散見されるが、ヨーロッパ覇権以前の多様な世界システムの析出に重点があるため、近代以降のグローバリゼーションとの関係性が不明瞭であると指摘する。

このような問題意識のもとで、序章では、3種類のグローバリゼーションの理論的な区別が提唱される。第一に、中心－周辺的なモデルに依拠して論じられる＜大文字のグローバリゼーション＞。第二に、プレモダンから存在し、必ずしも欧米を中心としない＜プライマリー・グローバリゼーション＞。第三に、周辺世界においてグローバリゼーション的な流れが独自の（多中心的／脱中心的で多様な）フローとして展開している状況＜トランスナショナルなフロー＞である。

序章では、この3層のグローバリゼーションの重なりを示し、多中心的で複雑なグローバリゼーションのありようを示す切り口として、①脱領土化と再領土化、②ディアスポラ、③ナショナルないしローカルな枠組みやアイデンティティの再生産、④グローバリゼーションの脱人間中心主義的次元の4つを設定し、それに即した形で各論文を紹介して

いる (pp.20-24)。ただし各論文の主題は複数のキーワードにまたがることから、本評では本書の目次に沿って各章の概要を述べたい。

第1章の床呂論文は、序章で整理された3つのグローバリゼーションがいかにスルー海域世界において重層的に絡み合いながら発現しているかを論じたものである。スルー海域世界では、国際市場へのパームオイルの輸出など、大文字のグローバリゼーションに即したモノや資本の南北間の移動がみられる。だが同時にこの地域では、中華世界への特殊海産物の輸出など、プレモダンの時代から非欧米中心的なフローも継続している。さらにいっけん在来知や土着知のようにみえる秘儀的知識（イルム）が、実際にはトランスナショナルな人や文化のフローに関わりながら形成されてきたことが示される。床呂は、これら3つのフローの同時進行的かつ複合的な絡まり合いを示すことを通じて、グローバル／ローカル、あるいはグローカルといった従来の図式を相対化する。

第2章の三尾論文は、序章で設定した第二の課題に取り組み、ベトナムにおける中国系移民を事例として、プライマリー・グローバリゼーションと今日のグローバリゼーションとの関わりに焦点を絞った議論を展開している。彼女は中国系移民がどのような戦略のなかで移動し、自らの移動や情報、モノのフローを経験し、ローカルな社会や中国、その他の社会といかなる関係を結んでいくのかを17世紀後半にさかのぼって検討し、今日のグローバリゼーション下での移動を駆動する「文化的ロジック」（思考、行動の枠組み）がそれ以前のグローバリゼーションと一定の連続性をもつことを示す。三尾はこうしたロジックの本質化の危険を指摘しつつも、人やモノ、情報のフローを生み出す人々の思考や行為の連続性を丹念に読み解くことが、経済的インパクトの大きさをもってグローバリゼーションを特別視する従来研究に疑問を投げかけうる人類学的視座の一つであると主張する。

第3章の錦田論文は、パレスチナ人とグローバリゼーションとの関わりを検討することで、当事者たちの間で抱かれる「中心／周辺」とは異なる独特な地理的認識の存在およびナショナルな帰属意識のありようを明らかにする。グローバル化が進展しても、ナショナル、またさらにミクロな帰属集団の単位が維持する影響力は決して弱まらない。また、パレスチナ人は常に「中心」から搾取される客体であるわけではなく、多様な生活戦略を通じて、中心国の「求心力」を時に資源・道具として利用することもある。さらにパレスチナを含む中東諸国には、欧米型の中心－周辺の世界観とは異なる秩序認識のあり方がある。錦田は、これらを指摘した後、彼らの悲願であるパレスチナ国家の成立がもたらさうる変化を思索する。

第4章の富沢論文は、マレー・ディアスポラ運動／マレー世界運動を取り上げ、その政治・文化実践のなかで民族概念がいかに再編・再配置されてきたかを明らかにする。マレー・ディアスポラ運動は、歴史的な各脈絡に応じて、マレー人性を構成する複数の指標（宗教、言語・慣習、王権など）を選別したり／組み合わせることで展開してきた。そのなかには今日のグローバル化と同様に、ある種のヒエラルキー構造（中心／周縁の階層性）も存在するが、あくまでマレー世界独自のものである。富沢は、マレー世界の多様な分枝間を連結・再連結するために、これらの諸要素を選択的に活性化させたり、潜伏させ

たりすることで、流動的なグローバリゼーションに即応できる人的資源とネットワークの最大化を導く、この運動のダイナミズムを示す。

第5章、岩谷論文は、インド経済におけるグローバル化の象徴「ショッピングモール」の陰で急増する露天商の実態に焦点を当てながら、グローバル資本による「再領土化」を契機とし、異なる経路と規模で人やモノのフローが誘発される可能性を示唆する。グローバリゼーションを論じる際の問題の一つは「前近代－近代－ポストモダン（グローバリゼーション）」といった直線的な移行モデルである。この移行モデルは、産業発展や近代化に伴い「いずれは消滅する部門」とみなされてきた露天商（をはじめとしたインフォーマル経済）に対する主流派の見方にもあてはまる。岩谷は、インドの露店業は近代化やグローバリゼーションによってむしろ活性化し、地域経済とコミュニティに密着した独自の人やモノのフローを創りだしていることを論じる。

第6章の井上論文は、東アフリカにおける観光に光をあてる。みやげ物業に携わる人々は、大文字のグローバリゼーションに対応しつつも、それとは異なる独自の移動・取引のトランス・ナショナルなフローを生みだしている。また、みやげ物業に従事する人々は、先進国の消費者が期待する「エキゾチック／未開さ」のステレオタイプのまなざしを「ミメシス」することを通じて、自己の文化的アイデンティティに抵触しないかたちで、「アフリカらしい」商品を創出・流通させていると指摘する。

第7章の木村論文は華僑ムスリムを事例に、グローバリゼーションを国民国家の溶解として認識しようとするこれまでの議論に対して、国民国家を生活の前提基盤としてこなかった人々が、グローバリゼーションをどのように理解し、いかなる共同体を形成してきたのかを問う。木村は、国民国家を鋳型としてこなかった華僑ムスリムたちにとって、現行のグローバル化に伴う国民国家の溶解や宗教知識の流動化は、逆に国民国家イデオロギーを概念化し、人を移住に導く契機となったり、より大きな宗教規範を認識させる契機となりうることを指摘する。

第8章の新井論文は、南アラビアのハドラマウト地方出身移民（ハドラミー）と祖国への送金に注目し、ハドラマウト在住者とハドラミー移民を含めた「実態」としてのハドラミー・コミュニティの歴史的変容を明らかにする。インド洋沿岸地域への大規模な移民が終息した近代以降も、ハドラマウト社会と移民との関係は、「送金・投資」に支えられる経済構造を維持している点で変化していない。新井は、プライマリー・グローバリゼーションの一翼を担っていたハドラミー・コミュニティは、領域性の解体という意味では大文字のグローバリゼーションに取り込まれつつ、しかし非西欧中心的なフローを維持していることを指摘する。

第9章の湖中論文は、東アフリカ牧畜社会における紛争と国内避難民を事例に、新自由主義的なグローバリゼーションの問題が顕在化した後の時代を「ポスト・グローバリゼーション期」と名づけ、そこでの人類学の役割を思考実験する。東アフリカ牧畜社会では、グローバリゼーションにより国家が溶解した結果、権力のフローが分散化し低強度紛争が発生し、インフォーマル経済のフローにより国境を越えて武器が拡散、情報のフローが時空間を圧縮して紛争が激化した。このような状況において国内避難民たちは直接民主主義



と互酬的経済を基盤とする地域共同体を作り、そこでの微細なフローを創出し、オートポイエーシスなシステムを維持することで辛うじて生き延びているという。湖中は、グローバル化が周辺世界で及ぼす暴力的で否定的な影響に注視しつつ、ささやかに実践されている人々の自律的営みに焦点を当てるのが人類学の射程であると指摘する。

第10章と第11章は、グローバリゼーションにおける脱人間中心主義的な視座を提示するものである。第10章の小松論文の目的は、バナナを主語としてグローバリゼーションについて語ることにある。19世紀末にグローバル商品化されたバナナには、ポリティカルエコノミー論から現在のグローバリゼーション論へと引き継がれた西欧を中心とする権力構造の枠組みとは異なる、もう一つの世界がある。彼女は人間が与える価値以外の「生きもの」としてのバナナの特質と人間との関わりを射程に入れる生態人類学の強みを生かし、先史時代からバナナが人類の拡散とローカルなニーズに即して移動を繰り返すことで、広い範囲で多様な栽培文化と多品種を生みだしてきたことを明らかにする。また、現在における商品としてのバナナのフローとして、多国籍業によって担われる資本主義的、中心-周辺的なグローバル商品のフロー、それに対抗して双方向性を目指すフェアトレード団体などによるオルタナティブ・フロー、そして生業を駆動力とする多中心のローカル・フローを示すとともに、その重なりの変容を検討し、豊かなバナナ文化の存続には、マーケットの複数性と生産者によるマーケットの選択の可能性を維持することが必須であると指摘する。

第11章の大村論文は、「政治＝テクノサイエンス＝経済」の複合体としてのグローバル・ネットワークが引き起こす多様な問題への対処のあり方を思考する。大村はまず、グローバル・ネットワークが事実上無法地帯と化してきたのは、自然／社会の二元論的な世界観により科学と政治が分離されてきた結果であるというラトゥールの理解と、それに対処するために人間の「社会」に限定されてきた議会制民主主義を「自然＝社会」にまで広げ、「モノの議会」を設置することでグローバル・ネットワークの暴走を制御しようとする構想を取り上げる。次に大村はこの構想には、このネットワークへの完全な包摂を拒否する外部の視点が欠けていることが問題であると述べ、ネットワークに部分的に取り込まれることを戦略的に甘受しつつ、生業の持続的な実践によって「大地」との絆という在来のオートポイエーシス・システムを守ろうとするイヌイトの先住民運動を取り上げる。この二つを合わせ、ラトゥールの「モノの議会」を「グローバル・ネットワークの議員」と「在来システムの議員」から成る「モノの二院制議会」に修正し、その議会に外部の多様な生き方を組み込んでいく対処のあり方を提唱する。

以上のように本書の各章はいずれも、序論で提示されたキーワードを組み合わせて、多中心的で複数のグローバリゼーションの可能性を提示する、興味深い議論を展開している。

本書に収録された各論文の対象（グローバルな人やモノの移動や越境交易、紛争や難民、観光、先住民権運動など）は既存のグローバリゼーションを扱った議論ののっとり、どちらかと言えば、オーソドックスなものである。また本書全体を貫くパースペクティブ

は、人々のミクロな実践や営みから、西欧中心主義的な概念や価値基準に即した理解の枠組みを相対化し、多元的な世界を想像／構想するという、グローバリゼーションの問題系に関わらず、近年の人類学が広く自らの学問的価値として見出している視座と共通する。このことは逆に言えば、これまで人類学は、グローバリゼーション現象とそれに関わる人々の多義的な実践を扱いながらも、既存の人文社会科学のグローバリゼーションの「前提」や「枠組み」それ自体を問い直すことを目的に議論を組み立ててこなかったともいえる。

しかし一方で評者は、西欧中心主義を乗り越えること、それ自体が昨今の文化人類学の「目的」と化すきらいがあること、あるいは人類学独自の視座が強調されることで他の学問分野との対話が十分に開かれていかないことに、しばしば窮屈さや不満を感じてみいる。

評者はまず、本書を通読してもプライマリー・グローバリゼーションやトランスナショナルなフローと、大文字のグローバリゼーションとの間に質的にどのような差異があるかが明確ではないことに疑問を持った。本書の寄稿者たちは、複数のグローバリゼーションの重層化された併存状況や、複数の層をつなぐ／切り分ける人々の実践や文化的論理を明らかにしたが、3つの層、とりわけ既存の研究が力を注いできた大文字のグローバリゼーションについては、最大公約数的理解や、それぞれの寄稿者が各論点に即して特定の側面（例えば、国民国家の溶解、脱領土化、新自由主義など）にその質を限定／決定して論じているようにも思われた。

西欧中心的なグローバリゼーションの理解の枠組みに依拠した従来の研究のすべてが、非欧米中心的なフローの存在や、それ以前のグローバルなフローとの連続性、多元的なグローバリゼーションの可能性を否定しているわけではないだろう。むしろ多くの研究は、その存在や可能性を取り上げないことで、狭義のグローバリゼーションの特質をめぐる自身の立場性や論点を明瞭化してきたのではないか。それゆえ、グローバリゼーションの概念の拡張や複数系のグローバリゼーションの提唱により、逆にみえにくくなる論点があるのではないかと感じられた。

例えば、評者は近年、中国を震源地とするトランス・ナショナルなインフォーマル交易のダイナミズムを東アフリカ商人による非正規品の交易を事例に研究している。知的財産権や入管法等に抵触しながら、これら中国と発展途上国間で形成されつつある独自の交易システムを扱う人類学者たちも、本書と同様に複数のグローバリゼーションの可能性を提示する。しかしこれらの研究が提起する「下からのグローバル化」[Mathews, Ribeiro & Vega eds. 2012] や「非覇権的な世界システム」[Ribeiro 2009] 等の議論は、「上からのグローバリゼーション」や「覇権的な世界システム」との質的な同一性や差異——例えば、速度や規模、運動の垂直性／水平性、経済倫理など——の比較を通じて、前者を支持するイデオロギー的な立場表明や理論的／实际的な根拠を示そうとする傾向にある。

この意味で、既存のグローバリゼーション研究の論点に最も直球で取り組んだ論文は、湖中論文であろう。しかし「周縁世界の側に立てば、言説空間の議論の焦点を、急進論から懐疑論に、肯定論から否定論に転換させる必要がある」(p.263) という湖中の主張は、

共感するところも大きいものの、本書の寄稿者たち全員に共有されているとは言い難い。寄稿者の多くは大文字のグローバリゼーションに対する人々のミクロな実践の影響力の評価に慎重な姿勢を採っているが、複数のグローバリゼーションの提示は、中心—周辺や急進論／懐疑論、肯定論／否定論といったグローバリゼーションの内実をめぐる議論からは離れ、グローバリゼーションをヴァナキュラーな動態へと展開する見方と親和性が高いように思われた。

また別の応答の仕方として大村が理路整然と論じた「モノの二院制議会」は興味深い。これをハイブリッド・モンスター化したグローバリゼーションへの普遍的で現実的な方途として想像するのは難しい。例えば、本書で示された幾層ものフローや生き物の可変的特質等を組み込んで議論する場合、在来オートポイエーシス・システムはどれくらい明瞭に取り出すことができるのだろうか。

このように考えると、本書はやや欲張りな論集であるようにも思われた。評者には、複数系のグローバリゼーションを提唱する以外にも、例えばプライマリー・グローバリゼーションなど特定の提案・切り口に絞り、主流派のグローバリゼーション論者を巻き込む形で議論を深めていく方法でもインパクトを持ちえたと感じられた。

とはいえ、それは本書を読んだ私たちの仕事なのかもしれない。本書は多岐にわたるグローバリゼーションの議論に対し人類学が切り開きうる多様な視座を明快に提示した優れた論文集である。ぜひ多くの方々に参照されたい。

<参考文献>

- Mathews, G., G. L. Ribeiro & C. A. Vega eds. 2012 *Globalization from Below: The World's Other Economy*. London and New York: Routledge.
- Ribeiro, G. L. 2009 "Non-hegemonic Globalizations. Alter-native Transnational Processes and Agents." *Anthropological Theory* 9 (3):1-33.